ホロコースト

２２２２１２８０

工学部　電気電子情報工学科　渡辺悠斗

今回の映画「戦場のピアニスト」はポーランドのワルシャワに住むユダヤ人のピアニストの話であるが、この映画の物語で重要となってくるのはやはりナチによるユダヤ人の迫害、大量虐殺である。第二次大戦中にはこれらの非情な行為はギリシャ語を語源とする「焼かれたいけにえ」という意味で「ホロコースト」と呼ばれていた。ホロコーストは組織的、官僚的、国家的に行われていたものであった。決して許されるべきではないが、当時のドイツ国内ではいろいろな思想や風潮などを背景として非道極まりない虐殺行為などが正当化されていた。ユダヤ人は多くのドイツ国民の恨み、妬み、そして復讐の対象へとなっていたのだ。

　ユダヤ人の差別は中世からヨーロッパ、キリスト教の社会で伝統的に行われていた。ユダヤ人は東ヨーロッパに多く、職業や住む場所を法で制限するなどの制動的な差別が多かったが、１８世紀末に起きたフランス革命によって市民社会となり、市民権を与えられた。ユダヤ人もユダヤ教徒としてではなく等しい人間であるという考えのもとに、制度的な差別がなくなっていった。しかし、差別の意識がなくなったわけではなく、さまざまな偏見を持たれるようになった。１９世紀になり資本主義が確立すると、市民的権利を得て様々な事業を始めるユダヤ人が出てくることになるが、そこで事業を成功させたユダヤ人たちは嫉妬や妬みの対象になることになった。資本主義は格差が開いていくもので、裕福になるものは悪目立ちすることが多く、ユダヤ人への反感が強く残ることになった。これらが近代的な反ユダヤ主義に繋がっていく。また、ユダヤ人の冤罪など反感を後押しする出来事も多く、ユダヤ人への差別の意識はより強くなっていった。

　そして第一次大戦後、人々の暮らしが苦しくなっていくにつれて反ユダヤの思想も高まっていった。ここからさらにユダヤへの偏見は強まっていく。当時の風刺画ではドイツの敗北の原因をオーストリアや国内の左翼勢力にあり、左翼とユダヤと結びつけるという考えが広まった。そして、ナチなどの反ユダヤ主義を掲げる勢力が台頭してくると、ヴェルサイユ体制を操っていたのはユダヤ人というレトリック（巧みな表現）を使い、支持を得ていった。ユダヤは宗教的な扱いから人種的な扱いに変化していく。さらに人種主義がヨーロッパで台頭するようになると、ナチスのリーダー、ヒトラーはこれを利用し、植民地化が進んでいくうえで支配を正当化するイデオロギーとしてヨーロッパの人種が一番優れていると主張し始めた。ナチスからしたらユダヤ人は最も劣った人種であり、アーリア人(ヨーロッパ人)が一番リードしていく、アーリア人がいるところにユダヤがいると毒され衰退する。だから混交、交わりを防ぐためにヨーロッパからなくすという、ホロコーストに繋がるユダヤ人への差別の意識が強くなった。

　その後ヒトラーはユダヤ人の排斥を国家の政策にしていく方法の一つとしてニュルンベルク人種法を作った。この法はユダヤ人をドイツ市民と認めず、役人や軍人になるどころかユダヤ人とアーリア人の結婚までも禁止するものだった。さらに、資産などを没収し、元々いた公職や軍隊に所属するものも追放された。ユダヤ人はドイツが併合したオーストリアへ移動され、アメリカやパレスチナへと追放されていた。しかし、支配地域が広がるにつれユダヤ人の数が増えると、ナチスはユダヤ人の殺戮を始めることになる。ポーランドではワルシャワにゲットーという狭い居住地域に押し込み、壁を作り、自由な行き来を制限した。そしてアインザッツグルペンというユダヤ人を銃殺する組織を作り、多くのユダヤ人が犠牲となった。その後ナチスはユダヤ人撲滅のためのさらなる効率化を求め、収容所にユダヤ人を送り込みガス室で大量殺りくをするようになった。ポーランドでは1943年4月のワルシャワ・ゲットー蜂起、1944年８月にはワルシャワ蜂起が起こったが、いずれもドイツ軍に抑えられ、ユダヤ人の虐殺は止まらなかった。ナチスは元々追放だけを行うつもりであったが結果的に大量虐殺の道をたどってしまったのは後に引けなくなったのだろうと感じる。そして当時のドイツ国民は一体どう思っていたのだろう。

映画の感想に入るが、この映画の主人公であるシュピルマンというピアニストはとても運が良く、心の強い人だと思った。体格はあるが心の弱そうな人だと観ながら思っていたので、最後はハッピーエンドで終わったのは意外だった。運が良いと言ったが、彼は強制収容所に送られる寸前に顔なじみの警察に助けてもらったり、2度の蜂起をなんとか生き残っていたり、この話が実話だと知った時はとても驚いた。映画の中では、何人ものユダヤ人が理不尽に死んでしまう、殺されてしまうが、映画を観ている自分でさえそれが当たり前だからしょうがないという気持ちに少しなってしまって、本当に生きる希望があったのだろうかと感じた。また、シュピルマンが音を出したら気づかれるという状況でピアノに向かい、指を触れずに頭の中でピアノを演奏していたシーンがとても印象に残っている。どんなに孤独でも空腹でも絶望的でも自分が自分であることを忘れなかったのだと思い、とても芯のある人で、生き残る運命だったのではないかと感じた。疑問に思ったことが一つあるが、物語終盤でシュピルマンを助けたドイツ軍人は結局戦犯捕虜収容所で亡くなってしまっていたが、シュピルマンが彼の存在に気づき、助けさせようとしていたらどうなっていたのか気になった。普通に考えれば戦争犯罪人として罪に問われたと思うが、シュピルマン本人の意向があれば助かる道もあったのだろうか。ドイツ軍人の彼がシュピルマンを助けたようにシュピルマンも彼を助けることができたらよいがさすがに厳しかったのかもしれない。最後のシュピルマンが演奏会でピアノを弾くシーンでは、壮大な演奏が彼の激動の人生を表しているかのようで、途中の演奏とは違った感じで聞こえた。